

『岩倉峡 近辺の治水問題 2 話』

05.09.19

自然愛・環境問題研究所
総括研究員 浅野 隆彦

1 話 = 実況の矛盾を解決する為に、「河道計画の見直し」が必要

岩倉観測所地点 (57.3283km) より 67m 上流の岩倉地点 (57.4km) の計画高水位が何故下流より低いのか? [126.946m - 126.59m = 0.356m]

「河道縦断面図」を調べると、凡その察しはついた。

大きくは現況堤防高さから来ているのである。右岸、左岸とも余裕高さが満たされていない状況なのだ。但し、右岸については遊水地事業が完成すれば、計画高水位の引上げが可能となる。

左岸は、木根地区 (木根・市場) であり、現在、遊水地事業未加入地区で、平野川流域の内水氾濫に悩んでいる。洪水時には、木津川堤防に設けられた平野川樋門が閉じられ、内水排除が不完全である為、再々浸水を重ねている。地区にとって頭の痛い問題として年も重ねた。

しかし、決断の時が来た。『30 年前の先輩たちは、遊水地とされることで、土地利用の自由度がなくなる事を最も危惧し、遊水地を拒否したんです。』(木根地区有力者の一人)

『内水氾濫の抜本的解決の為に、遊水地になる以外の方策が見つからないし、次の『河川整備計画』に乗っからな、その次が又遠うなってしまうで……。』(長田地区住民の一人)

私の聞き及ぶ範囲では、既に木根地区は遊水地事業を認める方向を木津川上流河川事務所に伝えている、との事である。この遊水地は約 120 万 m³ の湛水量になると言う。

河川管理者としては、いづれ「内水排除」の大々的な施設などが必要と認識していたもので、この振り替りは元々の「上野遊水地事業案」が完成する事になり、地域全体の為にメダシメダシと祝わねばなるまい。

さて、そうなると各地点の計画高水位を現況より 40cm 引上げることが出来る。「河道計画」の見直しが必要であろう。

2 話 = 「村田順三」に学ぼう

木津川断層の活動を受け、「上野大地震」と呼ばれる被害が生じたのは今から 151 年前の事である。岩倉峡に崩落があり、巨岩などの為舟運が絶たれたり、野間付近に幾つもの池が生まれたり、小田をはじめ三川合流部地域の地盤が 2m 以上沈下した所もあったと言う事

であった。

幕末時、人口も増えている中で、洪水氾濫常襲地帯へも新田開発が進んでいたが、明治3年の大洪水で小田地域は大被害を受けるに至ったのである。

私達が学ばねばならないのは、「避水移居」という村田順三の明晰な判断と実行力ではなかろうか。幾度もの洪水被害との無駄に近い闘い、ちゃんと発想を転換させ、自然をよく見た判断、それは「洪水氾濫地からは逃げるに限る」という、非常に単純な、結果的に最も賢い選択であった。又それを多くの村民に訴え、旧城濠を埋め立てるやり方で住居地を獲得するなど、解決の実行力は凄い。

現代の私達も、『自然の動きに無理に抗うことを避け、洪水氾濫地帯の開発などは、自然破壊と人命・財産被害及び税金の無駄遣いにつながる事を思いやる』という明晰な「村田順三的思考」に着きたいものである。